
2つの星に誓う

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つの星に誓う

【Nコード】

N6857U

【作者名】

白銀

【あらすじ】

7月7日、七夕。

1年に1度を約束された織姫と彦星が出会い、思いを込めた短冊を書いて2つの星に願う日。

その星に願いを託すことができない蘭は白紙の短冊を手にしたまま、ひとり夜空を見上げていた……

（前書き）

勢いだけで書いたからちょっとおかしいところ多々あるかもしれない
せん。

特に七夕についての説明とか（笑）

その日、毛利探偵事務所に大きな届け物がやってきた。
高さは1メートル半ほどの長細い丈夫な箱。今は横にしてあるため
高さではなく幅だが。

贈り主は、つい最近依頼を申し込んできた老人だった。
山ひとつを所有している裕福な人物で、人柄も悪くなかった。
依頼内容は大したものではなかったが、内容の割に報酬をたっぷり
もらえたことに小五郎は喜んだものだ。

その老人から突然送られてきた大きな箱。
その中に入っていたのは……

「笹……だな」

中身を確認した途端に小五郎はわかりやすくながっかりした。

贈り物は青々とした立派な笹だった。葉もしっかりと生えて新鮮
なのがよくわかる。

「きれいな笹だね。今日にちょうどいいじゃない」

箱の中を覗き込んでいた蘭は、小五郎とは違って嬉しそうに言う。

今日は7月7日。七夕である。

「あのおじいさんの山、竹林だったもんね。こんなに立派なの送っ
てくれるなんてラッキーじゃない！」

イベント事が好きな蘭は喜色満面だ。

一方、娘と違って興味が無い父は面白くなさそうだ。

蘭の様子にも何とも思わない小五郎はぶちぶちと文句を垂れながら椅子に座った。

勢いよく座った反動で椅子が悲鳴を上げる。

「どうせならタケノコにしてくれりゃ……」

「折角贈ってくれたのよ？文句言わないの！」

腰に手を当て小五郎をたしなめる蘭。

物が大きかっただけに期待を裏切られてがっかり感も大きいのだ。

どうでもよくなった小五郎は机の上に置いてあるスポーツ新聞を広げた。

「もう！無関心なんだから。ね、コナン君……って、あら？」

不服そうな表情で小五郎を睨みつけていた蘭は、隣にいるはずの居候の少年に話しかけた。

しかし、視線を落とした先にその姿はない。

部屋を見渡すとその少年はソファに座って小説を読んでいた。

「ん？呼んだ、蘭ねーちゃん？」

コナンは広げていた推理小説から、蘭に視線を向ける。

小五郎と同じように贈り物に興味を無くしていたコナンも、やっぱり同じような行動をとっていた。

なんとつまらない男たちだろうか。

「コナン君まで！」

蘭は深く長いため息をつく、腕を組み胡乱な瞳で2人を交互に見つめる。

その視線に不穏な気配を感じた小五郎とコナンはぎょっとして居住まいを正した。

「ま、まあ、こんな立派なものをタダでもらえたんだし、よかったよな、うん！」

「ほ、ほんといい笹だねー。飾り付けたらきれいだろっね！」

しばらく3人の間に重い沈黙が流れる。

時計の針が時を刻む音が響き、ごくりと唾を飲み込む音がした。

外からは車の騒音や自転車のベルの音、主婦のものらしい誰かの笑い声がする。

どこからか漏れ聞こえてくるテレビの音声の合間に、1階下の喫茶店の扉が開く音もした。

時間にして1分もなかったが、永遠かと思えるほどに長い60秒は2人の神経を十分にすり減らした。

「じゃあ、パーティーしよう？」

蘭の突然の言葉に、え？と同時に声を発する2人。

「七夕パーティーよ。いいよね？」

顔は真剣。もはや反論を許さない領域の声音で念を押す。

こうなったら小五郎とコナンに否を言う勇氣はない。

わかったよ…と、呟くように言う小五郎。

コナンは苦笑いしながら何度も首を縦に振った。

「やったー！たくさんごちそう作るからね！」

許可が下りた途端、ぱつと笑顔を輝かせてキッチンに向かう蘭。みんなも呼ぼう！と嬉しそうに言い、早速携帯をプッシュする。

その後ろ姿がキッチンの部屋ね消えるのを見届け、2人はまた同時にため息をついた。

さっきまでのものすごいプレッシャーを感じる重苦しい空気から解放され、こわばった身体から力を抜いた。

——今回は事務所の物が犠牲にならなくてよかったと、心の中でも2人はシンクロした。

『かんぱーい！！』

それぞれ違う飲み物の入った8個のグラスが、カランという音を立ててテーブルの上を交差する。

8人が囲むテーブルの上には蘭がはりきって作った御馳走が並び、お呼ばれした5人が持参した料理やお菓子も添えられていっぱいだった。

ビールの入ったグラスを早速あけ、小五郎は2杯目を注ぎ、上機嫌に酒と料理を楽しんでいる。

さっきの白けぶりが嘘のようだ。

他の7人…コナン、蘭、園子、元太、光彦、歩美、哀…は好きな料理をつつきながら談笑する。

嬉しそうにで料理をほおばる子どもたち。

話に夢中になる蘭と園子。

ひとりで晩酌を楽しむ小五郎。

そんなみんなの様子を眺めるコナンと哀。

楽しいパーティーの時間はあっという間に過ぎていく。

「ところでさ…七夕ってなんで願い事するんだ？」

テーブルの上が半分ほどなくなってきたところで、元太がフライドポテトをかじりながら言った。

その言葉に小五郎以外の全員の視線が元太に集中する。

そういえばなんでだろうね？と光彦と歩美も首をかしげた。

なんでと聞かれて蘭も園子も顔を見合わせた。

「中国の乞巧奠に、7月7日の夜、機織が上手な織姫にあやかつて、織女星をながめて技芸の上達を願う宮中行事がある。昔は宮中で梶の葉に書いた和歌を供える行事があつたんだが、江戸時代になると庶民に習い事が普及したことなどから梶の葉のかわりに短冊に色んな願い事を書く風習が広まったそうだ」

答えが出そうになかったので、見かねてコナンは知る限りの知識を披露することにした。

「そして、中国の牽牛星と織女の伝説と、日本の棚機女という民間信仰が結び付けられて変化したのが日本の七夕なんだ」

すらすらと淀みなく答えるコナン。

しかし、聞き覚えのない単語に疑問符を浮かべまくる聞き手たち。

そんな彼らのことは気にせずコナンは解説し、哀がそれに続いた。

「棚機女は、古い日本の楔ぎ行事。乙女が着物を織って棚にそなえ、神様を迎えて秋の豊作を祈ったり人々の穢れを祓うというものよ。その乙女が神様のために着物を作る時に使った織り機が棚機と言つて、これが現在の七夕と言われる行事の語源になったわけ」

どんどんわからなくなってきたと、すっかり目が点の一同。
言い出しっぺの元太は腕を組んで低く唸っている。話が全然処理しきれていないらしい。

「七夕行事が始まったのは奈良時代。江戸時代には宮廷や貴族の間で短冊に願い事を書き笹に飾る風習になった。

裁縫や書道の上達を祈うものだったけど、時代の移り変わりと共にどんな願い事でもいいことになったんだ」

言い終えてジューズを啜るコナン。

ようやく目的の答えが出たと、ほっという声が聞こえたのは誰の口からか。

「けんぎゅうせいとしよくじょ……の伝説とは？」

一番興味深く聞いていた光彦が質問を追加する。

これ以上はちよつとうんざりだとはのかに思いながら、元太と園子が微妙な表情を浮かべた。

ちなみに小五郎はさつきから全然聞いていないので、酒を飲んでひとりで盛り上がっている。

「織姫と彦星の話だよ」

「あ、それならわかるー！」

知っている単語に歩美が嬉しそうに明るい声を上げた。

「離ればなれにされた織姫様と彦星様が、1年に1度だけ会えるんだよね？」

理解できる話に一同がうんうんと首を振った。
これならついてこれる。

「雨が降ったら会えないけどね」

「え？そうなの？」

ポッキーをかじりながらぽつりとこぼした哀の言葉に蘭が尋ねる。

「川の水かさが増えて渡れなくなるからよ。でも、嘆く2人を見かねたかささぎの群れが橋になって会わせてくれるんだけどね」

「そうなんだあ。それ初めて聞いた！」

嬉しそうな歩美に、哀が微笑む。

「1年に1度……頻繁に会えない……なんだか誰かさんたちみたいよねー？」

グラスから口を離し、はつきりと言った園子の言葉に一同が視線を向ける。

「誰かさんたちって？」

歩美が興味津津と言った様子で瞳を輝かせる。

にやりと意地悪な笑みを浮かべた園子は、ぐつと身を乗り出すと楽しそうに答えた。

「蘭と新一君のことよ!」

ふえ!?!という間抜けな声を上げる蘭。箸で搦んでいたミニトマトがぽてんとテーブルの上を跳ねる。

そして、名前を呼ばれてぎょっとしたコナンはというと、飲んでいたジュースでむせそうになったのをどうにか堪えていた。

コナンの斜め前に座っていた哀がこっそり笑ったのをコナンは見逃さなかったが、ここで突っ込むと色々と面倒なことになるのでやめた。

隣にいるコナンの様子には気付かなかった蘭は、顔を赤らめて園子を睨む。

「どどうして新一なのよ!あいつは関係ないじゃない!」

動揺を隠せないその姿に、園子の嗜虐心が煽られたのか、ますます楽しそうに笑う。

「1年じゃないけど、たまにしか会えないってことは同じでしょ?」

「た、確かにそうだけど、私たちは別に恋人ってわけでも……」

「あら?じゃあ、会えなくてもさびしくなっただけ?」

「それは……」

「ほらみなさいよ。やっぱり彦星様しんいちくんが恋しいんじゃない?」

手を添えてお嬢様のような（実際にお嬢様だが）ポーズでほほと笑う園子。

言い返せなくなった蘭はゆでられたタコのように真っ赤になってしまった。

うつむいて隠してはいるがコナンも同じくらい真っ赤だ。

「おいこら！お前らそういう関係だったのか！？いつからだ！！」

聞き捨てならないと小五郎が躍起になって蘭に詰め寄る。

蘭は赤くなりすぎて湯気がたつ顔に怒りの混じった微妙な表情を浮かべて声を荒げる。

「違うわよ！し、新一とは別に何もな…」

「あれ？蘭おねーさん、前に恋人って聞いた時照れてたよね？凶星じゃないの？」

「これはただの照れ隠しよ」

「そっか！それじゃあやつぱり2人は恋人同士なんだね！」

「そうよ！もう夫婦みたいなもんだから」

「えー！夫婦なの？いいなー私もそういうふうになりたいーい！」

「なんだと！？蘭！俺は絶対に認めないからな！！あいつだけは絶対だ！！」

蘭の言葉を遮り、歩美と哀が園子の言わんとするところを指摘する。その様子をぼかんと眺めていた元太と光彦は途中から完全に傍観を決め込み、皆の知らないところで衝撃を受けまくっているコナンは、どうすることもできずに動揺と赤くなつた顔を隠すのに必死だ。

そんな少年たちの見守る（？）中、激怒する父の娘はやらん宣言と、恋話に敏感な女たちに凶星を突かれまくられる蘭。

ヒートアップする場の雰囲気は止められそうにない。

「美味しいですねー、このスープ」

「こっちの海老フライも最高だぜ？」

唯一マイペースな元太と光彦は料理をほおびりながら感想を言い合

っている。

蘭いじりで盛り上がり始めたパーティは子どもたちの帰る時間が来るまで続き、いじられまくった蘭（とコナン）は嵐が去った後、完璧に血が上った顔を冷やすのに苦労したのだった。

「蘭ねーちゃ……あれ、いない？」

寝る前におやすみを言おうと、軽くノックをした後、蘭の部屋の扉を開いた。しかし、中に彼女の姿はなく電気は暗いままだった。

キッチンやリビングにもいなかったし、1階下の事務所は鍵がかかっている。

風呂にはさっきまでコナンが入っていたし、玄関には靴があつたので出かけたわけではないだろう。そうすると……

「……屋上か」

すぐさま思い至ったコナンはサンダルに履き替えると、足早に屋上への階段を上った。

『離ればなれにされた織姫様と彦星様が、1年に1度だけ会えるんだよね?』

パーティーの最中に聞いた七夕の伝説。

誰でも知っている有名なお話。

この日、町では様々なイベントが行われ、家族や恋人たちが楽しげに過ごす。

2つの星に、どれだけの願いが託されたのだろう。

今日、パーティーの終盤にはみんなで願いを書いた短冊を笹に飾った。

カラフルな短冊と折り紙の飾りで華やかになった笹は、リビングの一角に花を添えている。

つるされた短冊は7枚。

1人の願いだけ、そこにはない。

ふと視線を手元に向ける。

赤い短冊が1枚。それにはなにも書かれていない。

書きたい願いはある。

しかし、あの場所を書くことができなかった。いや、書けなかった。理由は2つあったが、そのうちの1つはもう問題にならない。

残りの1つの理由が問題だった。

あと数時間もすれば明日になる。

それまでに願いを星に託さなければ、この短冊はただの紙切れになってしまう。

しかし、どうしても書けなかった。

「（新一……）」

——裏切られるかもしれない願いを書く勇氣はないのだ。

「蘭ねーちゃん、そんな恰好でじつとしてたら風邪引いちゃうよ？」

背後から聞こえた少年の声に、蘭ははっとして我に返った。

瞳に溜まった涙を慌ててぬぐい後ろを振り向くと、パジャマ姿のコナンがいた。

目があった瞬間、子どもしかった表情に心配そうな色が混じったのを見て、蘭は少し困った顔を作る。

泣いていたのを気づかれてしまったのだ。

「どうしたの…？」

小学生らしくないこの少年には、嘘も隠し事も簡単に見抜かれてしまう。

そのせいでつい甘えてしまうことが多い。見た目の割に頼りがいがありすぎて困る。

思わず正直に答えそうになったのを堪え、蘭は慌てて首を振った。

「何でもないの。ちょっと夜風に当たろうと思ったただだから」

苦笑いで答える蘭に、コナンはちょっと訝しげに首をひねったが、わかりやすい反応にますます気になったらしい。

蒼い瞳がまっすぐに蘭を見つめる。

見上げてくる優しい少年の気遣いに、蘭はどうしようかと悩んだ。少しくらい話してもいいかなと思ったが、あまり心配をかけさせたくないと話題を変えることにした。

「そうだ、明日の晩御飯の献立なんだけど、何がいい？」

至って普通を装い笑顔を作る。

しかし、コナンはそれを許してはくれそうになかった。

「我慢しないで。僕でよかったらいくらでも話を聞くから」

真剣な瞳を向けられ、優しいが有無を言わせないはつきりとした口調で蘭に言う。

しかし、蘭は悲しげな笑顔をコナンに向けるだけだった。

「（…蘭……）」

コナンは、蘭が何を考えて泣いていたのか、その理由をわかっていなかった。

さっきのパーティーでのこともあるし、何より、この少女がこういう風に悲しげな顔をする時…

いつだって答えはひとつなのだ。

その原因である自分が、わからないはずがない。

「新一にーちゃんのこと……？」

その言葉に蘭の瞳が見開かれる。

動揺と緊張が蘭の表情を強張らせたが、すぐに力のない笑みに戻っ

た。

蘭はゆっくりと顔を上に向け、コナンから夜空へと視線を移す。

「あー…なんでいつもわかつちゃうかなあ……」

やつぱりばれていたと自嘲的な笑みを浮かべ、星空の海に視線をさまよわせた。

「どこにいるのかなあって」

コナンが気まずそうに顔を俯かせたが、その様子に蘭は気がつかなかった。

工藤新一。

今もどこかで事件を追いまわしているだろう幼馴染。

半年前突然いなくなってから電話でしか会えないその少年は、ごくたまに帰ってくるもののすぐにいなくなってしまふ。

心配でたまらないのに、彼は何も話してくれないし、おかげで余計な不安ばかり募る。

新一のことを考え、言い始めてしまうと、止まらなくなる。

「最近電話したの随分前のような気がする……何してるんだろっねーあの推理オタクは」

笑みの形を崩さない蘭だったが、その声音は少しずつ揺れ始めた。

「こんなに心配してあげてるってのに、いい加減事件ばっか優先するのやめなさいよね……」

どんどん感情があふれてくる。
止めどない思い。

「あんまり帰ってこないと卒業できなくなるわよ」

願いを込められない白紙の短冊。
数文字だけの短い言葉。

「…みんなも、心配してるのにな…」

書くだけなら簡単はずなのに。

「…せめて理由を教えてほしいよ…」

それができないのは…

「…私と会いたくないのかって…思っちゃうじゃない…」

——最悪の予感が的中してほしくないから。

「蘭……ねーちゃん……」

少しの間、沈黙が流れる。

動かない星空を見上げたままの蘭は、視界に入った星座に視線を凝視する。

「私は……」

夜空に瞬く2つの星と、その間を隔てる星屑の川。

雨が降って水かさが増して、その川がどれだけ深く大きくなったとしても、カササギの橋渡しで2人は出会うことができる。

そう。

必ず会えるのだ。

「私は……」

ゆつくりと視線を下に下げる。

そこには蘭を見上げるコナンがいる。

泣きそうな、切なげな表情の少年が。

涙に濡れる瞳が揺れて、そこに映るコナンの姿も同様に歪む。

堪え切れずに零れ落ちた一滴が、乾いた頬を伝って服に小さな染みを作った。

「私は…… 織姫様が… 羨ましいな……」

蘭はかすれた声で言うと、力のない笑みを浮かべた。

羨望と諦めがないまぜになった表情の中に、隠しきれない思いが見え隠れする。

「待つてろって言われたけど……」

手の中にあるなにも書かれていない短冊を胸の位置まで持ち上げ、それを見つめる。

1年に1度を約束された織姫と彦星。

それにあやかれるならいくらでも書くだろつ。

しかし、新一と蘭の間にかささぎはいない。
あるのは深く広い川だけ。

「いつまで待てばいいの……？」

新一と再会したあの日。

ホテルのレストランでの短いひと時。

また事件が起きたと思ったら、死んでも帰ってくるという伝言を残していなくなった。

また何も理由を告げずに。

「不安なんだから……っ」

”死んでも”

それは、本当に死んでしまいかもしれない危険に身を置いていると
いうことなのか。

それを考えると怖くてたまらなくなるのだ。

真実なのだとしたら、次はないのかもしれないと。

「……それは……」

蘭の言葉に、コナンの胸がズキズキと痛む。

寂しい思いをさせているのはよくわかってる。

身体が縮んでからずっと自覚し続けているし、こんな蘭の姿を何度
も見ているのだから。

正体を隠して、本心を隠して。

全て偽っている自分は、いつだってこの少女を悲しませている。
大切だから守りたいだけなのに、何もかもがうまくいかない。

「辛いよ……」

苦しげに呟く言葉が夜風にかき消されて溶けていく。
止めどなく流れていく涙が頬を湿らせ、蘭はずっと我慢し続けた言葉を言った。

「電話だけじゃ…寂しいんだから……」

寂しい。

「次は、ちゃんと…帰ってきて…くれるの……？」

恋しい。

「早く会いたいよ…新一…っ」

会いたい。

「新一………!!」

――

” じじにいる ”

” 俺はここにいる！ ”

思わず叫びそうになった言葉をのみ込んで、コナンはきつく唇をかんだ。

小さな両手が真っ白になるほど握りしめて、手のひらにきつく爪が食い込む。

—— 今、そう言えるなら、どれだけよかっただろうか。

いつだって傍ににいるのに、誰よりも大切に思っているのに、悲しませたくないのに…

こんなに簡単な一言でさえ、今の新一^{コナン}には伝えることができない。

できるのは、江戸川コナンとして蘭を見守ってやることだけ。

「（いや……）」

実際のところ、自分は目の前で泣きぬれる少女に何もしてやれていない。

日本警察の救世主だと持てはやされていても、たったひとりの心を救うことができない。

見た目の通りの、小さくて無力な子ども。

新一を小さくした黒の組織のことはまだわからないことだらけだ。いつまで続くともれない戦いは、もしかしたら死ぬまで決着がつかないかもしれない。

全てが解決して、コナンが新一に戻る日はいつになるのか……それまで、新一は蘭を悲しませ続けることしかできないのだろうか。

「ごめんね……コナン君にこんなこと言ったって仕方ないのに……今の忘れてね？」

涙を拭きながら無理に笑顔を作る蘭。

見上げるコナンの苦しい表情に、何度目かの錯覚を覚えた蘭だったが、今は気がつかないふりをした。

コナンの目線に合わせるようにしゃがんだ蘭は、まだ少し濡れている短い黒髪を撫でた。

「あ……あのさ……」

「……もう遅いから、そろそろ寝なさい」

頭は必死に言葉を探すが、うまい言葉が出てこない。

それでも言葉を紡ごうとしたコナンだったが、蘭の声にかき消されて続きを言うことはできなかった。

「え……その」

「ほら、明日起きなくなっちゃうよ？」

二の句を継がせない蘭に、コナンは俯きしばし沈黙した。

2人の間に少し冷たくなった7月の夜風が吹きぬけ、2人の黒髪を揺らす。

小さく息を吐き、囁くようにうんと答えたコナンに蘭は微笑み、ゆっくりと扉に向かう少年の後ろ姿を見送る。

伝えることができない本心を胸の奥にきつくしまいこんで、コナンはそつと肩越しに蘭を見やってから屋上から姿を消した。

心が落ち着くまでどれくらいかかっただろうか、蘭はすっかり冷えてしまった身体を抱いて自宅の扉を開いた。

寝ている2人を起こさないよう足音を殺し、重い足取りで自室へと向かう。

リビングに入り、着飾られた笹を横目にとらえ、部屋の扉に手をかけた時、ふと違和感に気付いた。

リビングを見渡すと、違和感の正体はすぐわかった。

笹飾りの間に散りばめられた短冊。

つるされた短冊の数は8枚。1枚増えている。

蘭は視線を新しくつるされている黄色の短冊に固定し、立てかけられている笹竹に近づく。

文字が見える距離まできて、その短冊をそつと手に取った。

「あ……」

きれいな文字ではつきりと書かれていた内容に、蘭は無意識のうちに声を漏らした。

誰が書いたのか、考えるまでもない。

”新一にーちゃんの事件が解決して

前のような生活を取り戻して

蘭ねーちゃんの笑顔が戻ってきてくれますように”

悲しむ姿を見かねた優しい”かささぎ”の願い。

私にもいたのだ。

”彦星”がいなくなった日からずっと傍に。

架け橋とまではいなくても、代わりに見守ってくれている”かささぎ”。

蘭は乾いていた瞳から流れてきたの涙を指で払った。

やはりかなわないなと思いつながら、蘭は心が軽くなった気がした。成り行きで世話を任された子どもだったが、こんなにも大きな存在

になっていたとは。

「（…ありがとう、コナン君）」

蘭は手の中の赤い短冊に視線を落とすと、傍に置いてあったボールペンを手に取り、さらさらと願いを書きこむ。

願いではなく、祈りに変えた思い。

書き終えたそれを黄色の短冊の傍につるし、蘭は揺れる短を見つめて佇んでいた。

少しの間思いに更けた後、静かな足取りで自室へと歩く。

部屋へ入る時には、その顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

蘭が部屋の中に姿を消したのを確認して、コナンもまた寝室の扉を閉じた。

扉に背を預け、ずりずりと滑りながら床に腰を下ろすと、深く長いため息をついた。

短冊に気付かずに部屋に戻ってしまう可能性があったが、どうにか見てもらえたようでよかった。

気づかれないように様子を見守っていたが、とりあえずこれで元気づけられただろうか。

「（ごめんな、蘭）」

電話をしようと思ったのだが、今新一の声で蘭と会話しても、逆に寂しがらせることになってしまったと思った。

だから別の方法を考えるしかない、こうやって七夕行事の風習を利用して思いを伝えた。

”コナン”の言葉を借りて。

「（まだ当分帰れないだろうけど…）」

織姫を羨ましいと言った蘭の言葉を頭で反芻する。

「（…絶対迎えに行くから）」

かささぎなどいなくても、強引にでも川を渡ってみせるから、待っていてほしい。

それまでは、コナンとして傍で見守っているから。心の全てを癒せなくても、孤独にだけはさせない。

「（もう少しだけ時間をくれ）」

首だけを動かし、コナンは窓越しに見える夜空を見上げた。

煌めく天の川。その対岸に佇むベガとアルタイル。

離れていても思い続ける2人は、今日この日、再会を果たしているだろう。

——次の7月7日までには、淡く瞬く2つの星を穏やかな気持ちで眺めることができるように、一刻も早く奴ら決着をつける。

何度目かのその決意を深く胸に刻んで、コナンは布団にもぐりこんだ。

次の日まで数分。まだ織姫と彦星は再会を喜び合っていていられる日。

誰もいなくなったりリビングの窓辺には、短冊のかかった笹が静かに立っている。

9枚目につるされた赤い短冊には、思いを込めた願いが書かれていた。

”新一がどこで何をしていたとしても、どうか無事でいてくれますように”

——その裏に小さくひとこと添えられて。

”信じてるからね、新一”

（後書き）

短編のつもりが結構長い……

最後まで見てくれてありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6857u/>

2つの星に誓う

2011年10月9日05時11分発行